

白
い
焰



白い猨

津村節子

読売新聞社

しろ はのお
白い焰

昭和四十六年三月十日 第一刷

著 者 津村節子
つむらぜつこ

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

東京都中央区銀座三の二の一 千一〇四
大阪市北区野崎町七七 千五三〇
北九州市小倉区明和町一の一 千八〇二

印刷所 株式会社 細川活版所

製本所 協和製本株式会社

定価 五五〇円

© Setsuko Tsumura, 1971

目

次

冬 館	白 い 焰	女 友 達	遠 い 月
123	93	61	5

あとがき	不惑	暗い海	蔵の中	奇禍
269	237	211	183	157

装丁
大村一彦

遠
い
月

救急病院ではないので、赤い電灯もすでに消え、入口の扉も固くとざされていた。建売り住宅を改築したらしいとってつけたような診療室を備えているその医院は、玄関の造りも住宅風なので、夜半に駆けつけた患者には、診療を冷たく拒否されているように感じられた。

思い切って押しボタンを押すと、奥の方でかすかにブザーの鳴る音がした。しかし、家の中は無人のように静まり返っている。

稲荷神社の杜のちょうど裏手の畠を、地主がかなり広範囲に手離して宅地造成されたばかりの分譲地である。黒々と拡がる闇の中に、建前の終ったばかりらしい木組みだけの家が、白く骨格のよりに浮き出して見えている。

明方近くまで車の音が絶えない街道すじの商店街に住んでいる速夫たちにとって、夜はまだそれほど更けているとは思われなかったが、分譲地周辺の疎らな家々は寝に就いてからかなりの時間が

経過しているような静まり方であった。

由美子は気をかねるらしい様子であったが、速夫は執拗にブザーを鳴らし続けた。由美子の傷は、一刻もこの儘にして置けない状態であるように思われて心がせかれた。

やがて、奥の方にあかりがついたのが、扉にはめ込まれているすりガラスにうつった。足音が廊下を渡って近づいてくると、由美子は尻込みする様子を見せた。こんな時刻に厚かましいブザーの鳴らしかたをしたことも気兼ねなのだろうが、自分のけがが尋常なものでないことも気が臆するらしい。

速夫は、無意識に由美子の二の腕をきつくつかんでいた。医者であるのに、重傷の患者を戸外に長く待たせていることに憤りを感じて気を高ぶらせていた。

玄関ホールのスイッチが点じられ、細目に開けられた扉の間から、不機嫌そうな中年の男の顔がのぞいた。熟睡していたらしく、大きな顔がむくんでいる。が、速夫の陰に隠れるように立っている由美子の顔を見ると、扉は一旦閉められ、防犯チェーンをはずす音がして今度は大きくいっばいに開かれた。

由美子の蒼白な顔は血にまみれ、額から後頭部にかけて応急に巻いてきた手拭にも血が浸み出し、ほつれた髪が頬にはりついている。夜更けだから人目につかずに済んだので、宵の口だっ

たら到底歩いて来られる顔ではなかった。速夫は車を拾おうとしたのだが、つましさの身に浸み込んでゐる由美子が、大丈夫、たいしたことはないから、と故意に元気を装って、先に立って歩いて来たのである。

「こんな時間に——」

明るい診療室に通されると由美子は身を怯ませ、医者が示した丸い回転椅子に浅く腰をおろした。医者は幾分手荒く由美子の顔を電灯の方へ向け、薬品を浸したガーゼで血を拭いた。速夫は血の色に動転してしまっていたが、拭いてみると、後頭部の傷はかなり深かったが、耳から頬にかけての二、三箇所かしよの傷はさほどのことはなく、懸念したガラスの破片もはいっていなかった。

「ところで、窓ガラスに首をつつ込みまして——」

由美子は、医者に問われぬうちに弁解するように言った。無口な医者は何も言わなかったが、由美子の言葉を信じた様子にはなかった。

顔と頭の手当がすむと、由美子は隠すようにしていた左手を差し出した。顔にばかり気をとられていて、速夫は手の傷には気づかずにいたのだが、横倒しになったとき砕け散ったガラスの上に手を突いたものか、傷は顔よりも深く、医者はピンセットでガラスの破片をせせり出し、由美子は苦痛の声をあげた。速夫は、由美子の痛みが自分の脳髓を刺し貫いたように感じられて蒼白になり、

唇をかみしめた。

黒いレザー張りの寝台に横になった由美子の下半身に、速夫は毛布をかけてやった。局部麻酔が打たれ、傷口は手早く二針で縫い合わされた。速夫は由美子の寝台の傍にしゃがみ込み、冷たい脂汗を流していた。

「明日また来なさい」

医者、はじめて口を開いた。

速夫は少しの間由美子を休ませて貰いたいと思ったが、由美子は寝ている医者を起したというだけで恐縮しきっていたから、治療が終るとすぐに立ち上った。

が、軽い貧血を起し、速夫の肩にすがった。それでも医者は休んで行くように、とは言わなかった。

化膿予防の抗生物質らしい薬を貰い、丁寧すぎると思われるほど丁寧に礼をのべる由美子をうながして速夫は、医院を出た。ふたりが寄り添うようにしてかなり歩き出してから、医院の玄関のあたりが消えた。

「無愛想な医者だな」

「でも、根は親切な人なんだわね」

由美子は、患者が出て行つたあと暫くあかりを消さずにいた医者の心遣いに気づくほど落着いてゐた。外灯もない新開地は、材木や土台石の残りが放置されており、トラックのタイヤが舗装されてゐない道路をくぼませていたりして、迂闊には歩けない有様だった。

速夫は由美子を支えるようにしながら、神社の杜の周囲をめぐるっている細い径をゆっくりと歩いた。背負つてやろうかと思つたが、由美子は思ひのほかしつかりした足どりで歩いている。かぼそい軀つきの由美子のどこにこんな氣丈さがひそんでいるのかと見直す思ひである。細い竹がよくしなうように、女のほうが男よりも強靱なのだろうか。それとも、あの男の絶え間ない虐待が、由美子の軀も神経もこのように鍛え上げてしまったのだろうか。

不意に由美子の足が停つた。訝しく思つて立ち停ると、前方の杜のはずれの外灯の下に男の影があつた。

来てやがる――

速夫は吐き捨てるようにつぶやいた。

男はふたりの姿を認めたらしく、二、三步こちらに歩み出し、躊躇うように立ち停つた。

畜生、恥知らず――

速夫は胸がたぎり、足がもつれそうになつた。

男との距離がちぢまると、速夫は由美子の腕を抱え込んだ。そして、男を無視するように足を速めた。

男は近寄りかけて、速夫の様子に気圧されたのか身をひいた。速夫は由美子の傷をいたわることなど忘れて一層急ぎ足になった。男は怯^{おそ}怯^{おそ}とふたりの後からついて来る。

と、速夫は自分の腕が重くなるのを感じて、由美子をかえりみた。由美子の軀が、急に重量を増したように感じられた。由美子は無意識なのだろうが、速夫に逆らって歩調をゆるめているのだ。速夫は憤^{いら}ろしさに顔が熱くなった。無言で由美子の腕を強く引くと、彼女はそれに気づいたのか、速夫に媚^こびるように小走りになった。

街道に出ると、速夫はちょうど来合わせた車に向って手を上げた。自分でも予期しない行為であった。

「速夫ちゃん、どうするの」

「どうするって、ねえさん、うちへ帰る気かい」

速夫の気負った言い方に、

「だって、ほかに行くところなんか」

と彼女は口籠^{くも}った。

「どこだつてあるさ」

速夫は、ドアの中へ由美子の軀を押し込んだ。

追いついた男は、慌てて車に駆け寄った。その鼻先で、速夫は音高くドアを閉めた。

走り出した車のガラス窓に、泣きそうにゆがんだ男の顔がうつった。速夫はしっかりと由美子の膝を押えつながら、女を拉致するような奇妙な心の高ぶりを感じていた。

運転手に行き先を問われて、速夫は咄嗟に言葉が出なかった。由美子の言うように、行き先などあるわけがなかった。あの男から由美子を切り離してかくまうことの出来る親戚や友人も東京にはいなかったし、一晚厄介になるだけの知人さえなかった。

「どこか、静かな旅館知らない？」

速夫は、すれからし感じで言つたつもりであつたが、自分の声でないようなかすれ声になつてゐた。どうせ姉弟に見える筈はなかった。行きどころのないふたりは、つれこみ宿へでも泊るより仕方がない。

「この近くで？」

運転手は幾分馴れ馴れしい口調になつた。

「ああ、あまり遠くないほうがいいんだ」

「速夫ちゃん」

由美子は、当惑しきっている。

「敏江が心配だわ」

「だいじょうぶだよ。あいつは敏ちゃんにはやさしいんだから」

車は、ボート池のある木立深い公園の傍の道を走り、池から流れ出している小さな川添いの宿の前に停った。

門から玄関まで見通せぬように植込みの間を砂利道が曲りくねっており、門灯も玄関の明りもほの暗い。

「速夫ちゃん、本当にこんな家に泊る気なの？」

「ああ、金、まだあるだろう？」

医者へ行くとき、有金全部を持って出たのだ。

「お金のことじゃないわ。こんな旅館に泊るわけにはいかないわ」

「かまうことないよ。姉弟なんだから」

「姉弟でこんなところへ泊るのは変だわ」

「他人は姉弟と思わないからいいじゃないか」